
IRON BROW

北町ヨッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I R O N B R O W

【Nコード】

N 6 6 7 5 H

【作者名】

北町ヨッシー

【あらすじ】

ちよつと未来のアメリカと中国の関係が急速に悪化した世界での傭兵たちの生きざまなどを描く予定です。この小説のメインの登場キャラには金で動くような輩はいません。あしからず。ちよつと人によつたら残酷と思われるシーンがあるかもしれません。

第0話　暗夜に霜が降る如く

（2010年夏）

ここはベトナムのある熱帯雨林の中である。

少し地面がくぼんだ所にある狙撃兵が三八式狙撃銃を構えていた。姿勢は伏せ撃ちだ。

三八式「狙撃銃」というのは旧日本軍屈指の名銃、

三八式歩兵銃から特に精度の高いものを選抜し、

特別な改造を受けたという銃で、製造から70年近くたった今でも現在の狙撃銃と比べてそんな色のない精度を誇っている。

第二次世界大戦において旧陸軍はこれを装備した狙撃隊を効果的に運用し

連合軍を苦しめた。

「ターゲット確認。距離700。10時の方向」

淡々とした調子で告げたのは観測手を務めるケビン・ロジャーだ。

狙撃手、吉崎昇よしざきしょうは沈黙で肯定する。

彼は25歳と若いが、その圧倒的な狙撃能力で「神の弾丸」の異名を持っている。

昇とケ빈は、昇の父が経営する民間軍事会社に所属していた。

この会社は世界でも5本の指に入る兵力を持っている。

そして昇など個人に対する依頼も請け負っていた。

今回のターゲットはベトナム親米政府に反対するゲリラの軍事顧問の中国人将校だ。

現在急速に力をつけた中国と覇権国家たろうとするアメリカの関係はかなり悪化していた。

ちなみにこれはゲリラに手を焼くベトナム軍の依頼である。

ターゲットはまったく油断していた。

そして昇はそのこめかみに照準を合わせると、ゆっくりと引き金を

引いた。

火薬は計算通りに燃焼し、銃口から6・5mm弾を送り出す。

弾丸は予定された進路を見事にトレースし、

ターゲットのこめかみのあたりに収束した。

わずかに残った首の力で弾丸が飛んできた方を向くとそのまま仰向けに地面に倒れ

そのまま動くことはなかった。

「命中。ターゲットの死亡を確認。さすがですね、こんかいも一発でぶちぬいた」

「ふう、終わったか。彼は誰にやられたかもわからなかっただろうなあ」

「それが狙撃ってもんじゃないですか」

「まあそうか」

「さあ、こんな不快なジャングルからはさっさと帰ろう。」

基地に戻ったらまずは社長に報告だ」

彼等はたった今人を殺めたとは思えない、

日常の業務を終えたサラリーマンのような口調で話しながら

特別に休養や補給のために使わせてもらっているベトナム陸軍の基地へと戻っていった。

to be continue

時代背景設定や諸々のお断りなど

この小説の舞台は

ほぼ今の世界と同じと思っていただいて差し支えありません。

でも、急速に力を付けた中国と、唯一の覇権国家の地位を守りたいアメリカの関係がかなり悪化しています。

世界各地で親米派閥と親中派閥が争っています。

アメリカは中国の民族主義運動を、

中国は反米組織を援助してます。

そしてその間にいるのが傭兵達ですが、

この話の主な登場人物は

だいたいが親米的なある民間軍事会社のメンバーです。

ちなみにこの会社は裏の部分として雇われ特殊部隊

IRON BLOW (鋼鉄の疾風^{かせ})

を持っています、詳しくは作中で。

あらかじめ断っておきますが、

特殊部隊というのは本来

個人で運べる装備が多かったりするために単独行動が出来る部隊ですが、

この小説ではイメージ通りの高い戦闘能力、技術を持つ兵士たちの部隊となっています。

後、登場する兵器ですが

某巨大掲示板や某インターネット百科事典を参考にしています。

おかしなところがあつたらご一報ください。

確認の上、速やかに反映します。

視点は変わる事もあるとおもいますが、

だいたい狙撃兵の吉崎昇を視点に展開させるよていです。

基本的にシリアス中心の本編と、ギャグややりたいことをやる番外編で構成していきたいと思います。

そして話の切り替わりなどですこしづつ人物紹介も入れていきたい
と思います。それでは次話から小説本編に戻りますが、
この小説で少しでも読者の方が楽しんで頂けたら至上の喜びです。

0. 5話〈幕間〉

何事もなく仕事を終えた昇とケビンがベトナム軍の基地に戻ると社長、吉崎大武よしざきひろたけが待っていた。

「二人共戻ったか。聞くまでもないと思うが仕事はどうだった？」

「いつも通りの理想的な一撃必殺ワンショット・ワンキルでしたよ」「ところで親父自らこんなところまでどうしたんだ」

「ああ、まあ率直に言うとも早速次の仕事だ」

「まじっすか…」

「文句を言うなケビン。傭兵は」

「あー分かってますって。『傭兵は信頼第一だ。我々は信頼に答えているからこそ安定した収入を得られる』でしょ？」

ところでこの

「信頼」についてだが、実は吉崎の会社にはあるカラクリがある。

この会社は民間軍事会社にも関わらず、諜報部という部署を持っているのだ。

—もちろんその存在は嚴重に秘匿されているが—
そして諜報部からもたらされる情報を元に世界の様々な場所の拠点に兵力を展開させる。

そうすることで他には真似できないスピードで依頼を遂行できるようになり、結果的に圧倒的な信頼を勝ち得ているのだ。「次の任務は近々サイゴンのホテルでASEANの会合がある。その警備をする」

「なんで俺達がそんなことを。ベトナム軍がやりやあいじゃないっすか」

この疑問には昇が答えた。

「いまベトナム軍はゲリラ狩りで忙しいんだ。こんな重要なことを

依頼されるのは信頼の証さ」「まあとにかくだ。俺がここに来たのは言伝てを頼んだりするより自分で伝えた方が早いと思ったからだ。ほら、さっさと行くぞ」

そして彼らは輸送機に乗り込んでいった。

迎撃（前書き）

テロリストが攻撃してきます。

迎撃

ホテル本館から離れた場所にある別館。

現在東南アジア各国の首脳が会議を行っている。

この建物は本館から通じる一本道を通らないと来られないので警備上便利だ。

その一本道の別館側出口にはM2機関銃が据え付けられた検問が設けられていて、警備を担当する吉崎の傭兵会社の社員が詰めていた。

この会社の中でも最精鋭のIRONBLOW第一分隊の第5席、コールサインIB-5のドイツ人、リヒャルト・フォン・ファルケンハウストと同じく第8席でIB-8の日本は神戸の出身、大黒文和だ。

「かれこれ四半日詰めとおけどほんまだれもけえへんなあ」

と関西弁（神戸方言）丸出しでぼやくのは大黒。

一時間に一回聞かされるぼやきに

「当然だ。一般人は近付けない。第一近付いて貰っては困る」

といかにもドイツ人というように実直かつ真面目に返すのはファルケンハウストだ

「せやけど…？ あれは」

「どうした」

その時、大黒の目が猛然と突進してくる何台かの自動車を捉えた。

「ようやく敵さん来はったでえ」

「ああ」

二人は目を合わせると機関銃に飛び付き猛烈なフルオート射撃を開始した。

機関銃が次々に12.7mm弾を吐き出す音は会議中の首脳達の耳にも届いた。

「始まったようだな」

ベトナム大統領コーは誰に言うでもなく呟いた。

「だが、傭兵ごときに任せて大丈夫なのか」

「大丈夫だ」

不安を隠せない様子のタイ首相に、自信ありげに言い切ったが彼自身も一抹の不安はどうしても消えなかった。

傭兵たちのボスである吉崎大武は、この仕事では二個分隊を直率して会議場のフロアに分散して伏せさせていた。

その大武の耳にも戦闘の音は届いていた。

「来たか」

そう一言だけ呟くと傍らの通信機を取り、全員への回線を開いた。

「ジェネラルよりIB-7（大黒）、状況知らせ」

『IB-7よりジェネラル、どうもあかん。』

たぶん防弾を強化しとんやろけど、12.7しこたまぶちこんでもなかなか効かへん。

このままやったら乗りもん潰すんで精一杯やわ」

「了解。」

全弾撃ち尽くした後検問を爆破、ライン『キャッスル』まで後退せよ。

一個分隊で合流する」

「IB-7了解」

「IB-5了解」

簡潔な返事を聞くと、また別の回線を開いた。

「ジェネラルより外周警戒中の各員へ。」

哨戒を中止し可及的速やかにライン『キャッスル』へ向かえ。以上」

命令を下し終わると、彼自らも傍らのアサルトライフルを肩に掛け、大儀そうに立ち上がった。

「さて、行くか。I B 第二分隊、俺に続け！」

そして彼も戦場へと駆け出した。

―検問―

「あとどんぐらい残っとお？」

「1342発」

「なんでそんな細かいねん」

「一発ずつ数えている」

「：まあええわ。撃ち尽くしたら地雷全部爆発さしてスタングレネードたたきこんで退却。」

OK？」

スタングレネードとは敵に大きな音をぶつけてショック状態を起こさせる非殺傷兵器の一つだ。
ノンリールサルウエボン

「ああ」

と、その時、大黒のM2は吐き出す弾を失い沈黙した。

「切れたわ」

そういうと大黒は傍らに置いてあった大型のホッチキスのようなものを手に取った。

対人用地雷クレイモアの爆破装置である。

これには細工がしてあって特定のスイッチを押せばすべての地雷を爆破できるようになっている。

「ワンミニッツ（後一分）」

「よっしゃ、最後はカウントダウン頼むで」

「わかつている」

「無愛想やなあ」

ばやきながらもMP5を片手で撃ちまくる。

殆ど命中していないが狙いが付けられず逆に弾道を予想しにくい

めいい牽制になっている。

$$\begin{matrix} \lceil & 1 \\ & 0, \\ & 9, \\ & 8, \\ & 7 \\ \rfloor & \vdots \end{matrix}$$

「よっしやあ」

ファルケンハウストのM2も見ろうちに残弾を減らす。

大黒はMP5を肩にかけると片手に爆破装置、もう片方の手には2つスタングレネードを持った。

$$\begin{matrix} \lceil & & \\ 3、 & & \\ 2、 & & \\ 1 & & \rfloor \end{matrix}$$
[illegible]

思い切り叫ぶと左手で爆破装置を押し、右手で全身全霊を込めてス
タングレネードを放った。

次々に爆発音が響き石畳がめくれ人が吹き飛ぶ。

そんな阿鼻叫喚を尻目に二人はわき目も振らずに全力で走り出した。

追撃は来ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6675h/>

IRON BROW

2010年10月15日15時24分発行